

教育長日記 (平成28年5月10日)

青い空に浮かぶ白い雲 102

—新しい一歩—

東大和市教育委員会 教育長 真如昌美

(今日の言葉) 走った距離は 裏切らない (マラソンランナー野口みずきさんがよく使った言葉)

4月、子どもたちは、入学式や始業式を経て一人ひとり新しい一歩を踏み出しました。

一方、本年度から東大和市の小学校、中学校で新規採用教員としてスタートを切った教員は、小学校で10人、中学校で3人でした。(※他に期限付き任用教員は小学校6人中学校4人)

学校訪問をしていると、校長先生が「本校新規採用教員の〇〇〇〇教諭です」と紹介して下さることがあります。紹介された教員は、緊張した表情で名を名乗り「どうぞよろしく願いいたします」と、はっきりとした声で爽やかに挨拶をしてくれます。「子供たちの名前は覚ええましたか」「通勤にはどのくらい時間がかかりますか」と二言三言質問をすると、仕事の大変さを感じながらもしっかりと頑張っている様子が伝わってきます。

校長先生が職員を紹介するという事は、将来に向けての期待の表われです。『鉄は熱いうちに打て』校長先生には、好機逸すべからずの気持ちで新規採用教員の育成をお願いします。

鉛筆の持ち方

教育委員会学校訪問などで、各教室を訪問して気になることのひとつに、子どもたちの「鉛筆の持ち方」があります。小学校の一年生で「正しい鉛筆の持ち方」という指導がありますが、子供たちの鉛筆の持ち方は様々で、「正しい鉛筆の持ち方」ができていない子どもはごく少数です。持ち方によってはスムーズに鉛筆が走らず、ごつごつした文字や大きさの整わない文字になってしまっていて、書くスピードも鈍りがちです。

一年生の教室に入ると、高学年よりも正しい鉛筆の持ち方のできている子どもが多いことに気がつきます。一年生の担任の先生がしっかりと指導している結果であると思います。漢字や平仮名の美しさは、日本の伝統文化です。「正しい鉛筆の持ち方」をもう一度、指導してみてください。

育てられたこと

真如昌美

遠い、遠い昔、私が新規採用教員として小平市立小平第五小学校に勤務していた頃、港区立南海小学校で、表現運動の授業公開があった。授業者は村田久子先生、採用一年目の私は、表現運動の指導の仕方がさっぱり分からなかったので、電車を乗継ぎ授業を参観に行った。

初めて参観した村田久子先生の授業は、躍動感があり、吸い込まれるような授業だった。私はその日、「村田久子」という名前をしっかりと覚えて帰った。

四年後、私は港区立氷川小学校に異動した。その後、校舎の改築があり、さらに数年経って、村田久子先生が、氷川小学校の校長として着任された。

血気盛んな三十代の私は、村田校長先生によく叱られた。ある時、校庭で表現運動を指導していたところ、校長室からその様子をご覧になっていた先生が、たまたま出でてきて、「この続きは私が行うから、あなたはここでしっかりと見ていなさい」と言って指導を始めた。

夏休みに指導主事試験の論文指導も受けた。前夜に書いた論文を、翌朝提出すると、水泳指導を終えた頃には赤ペンで丁寧に添削された論文が机上に置かれていた。夜書き直し、朝また提出することの繰り返しで、夏休み中に先生から示された十問の論文を書き、添削を受け、再提出したので、少なくとも二十回論文を書いた。

その後も叱られることが多かったが、素直に吸収できた。亡くなった事を知った日、私は帰りの電車の中で泣いた。